

子どもと共なる日々

松原 和子

袋小路に面している我が家の前に、三輪車、補助つき二輪車が、十台ほど止まっています。道には、チョークで何やら線路のようなものが書かれています。

庭に出した敷物の上で、二歳から六歳までの子どもが、お菓子を真中にワイワイ集まっています。六歳の大きい方の子は、次に何をして遊ぼうか相談しながら、四歳位のは、夢中で、二歳位のは、お菓子を手にウロウロしながら食べています。

これは、我が家の三人の子（長女六歳・次女四歳・長男二歳）と、それぞれの友だちが集まったの、三時頃のおやつ風景です。

すぐそばに、日本海を見下ろせる小高い小さい丘もあり、自動車もそれほどこない遊びやすい環境に住めることに感謝

しつつ、子どもと共なる日々を過ごしております。

しかし、長女が生まれてから、この安定した友だち集団ができるまでに、様々な問題にぶつかりました。そして考えたことや、努力してみたこともありませぬので、家庭にいる母親の立場から、集団づくりという点について、この機会に整理させていただきます。

我が子の成長を、逐一自分の目で、手で、観察してみたいというわがままからと、少なくとも小学校に入る位までは、母親との関係を密に育てたいという考えで、長女出産と同時に、仕事を辞めて家庭に入りました。

しかし、長女二歳半・次女一歳の頃から、子どもにとってのはのびのび遊べる友だち、母親にとっても、共に語り合えるような集団が欲しいと思いました。

近所に殆んど同年齢の子ども、母親がいなかったこともあって、なにか良いグループ活動がないかしらと、捜してみました。（頭には、お茶の水女子大の松村研究室での、女子集団指導のグループ活動がありました）が、結局私の思うようなものではなく、最後に訪ねた新聞社の人に、「それでは投書

の形で主旨を述べて、有志を募ってみては」と、助言されました。

「大自然の中で、子どもをのびのび遊ばせながら、母親も共に育つような集団づくりを、してみませんか」という内容で、投書してみました。社の人の配慮で、電話番号・住所は記しませんでした。社を通じてかなりの反応がありました。

そしてできたのが、母子のびのびグループでした。母親七人ほど、子ども十人ほど（三歳〜一歳）で、毎週一回、市の中心に近い海岸沿いの松林に、お弁当を持って集まりました。子どもを遊ばせながらですので、テーマ活動はなかなかはかどりません。それでも、子どもがいるが故に、社会とつながるチャンスを持ってなく、イライラしていた人達が多かっただけに、活発な集まりとなりました。

子どもたちは、最初慣れないので、親のまわりにウロウロ―それでも他の子を非常に意識しながら―していました。車のある人が、遊び道具の運び役になりましたが、回を重ねるにつれ、それらの取り合いが始まりました。そうすると、仲裁役をする子がでてきたり、すぐたくという手段に訴える子がいたり、場面場面で面白い子どもの姿が見られました。

長女も私から離れなくて困る方でしたが、このグループに参加するようになってから、友だちとの行動が、活発になったようです。友だちと、松林の中を探検するまでに成長しました。

目の前に、常にこのような子の活動が展開していますから、そこで生じる問題を取り上げれば、母親の話題には事欠かないのですが、他に次のようなことを、話し合いました。

日常の基本的な生活習慣を身につけさせる方法・思いやりなどの情操面の育て方・近所の母親たちとの、子を通してのつき合い方・自然食品のすすめ・嫁姑の問題（メンバーの中に、この問題で離婚しかかっている人がいました）などです。また外国人の育児を参考してみたいということで、英語に堪能なメンバーの助けを借りて、同年齢の子どものいる外人の家庭を、訪ねたりもしました。

おもちゃの研究と称して、デパート歩きもしました。母親の活動が主になって、子どもが迷惑、という目もありましたが、母親が生き生きしているということは、子どものためにもなるという主義で、運営していきましました。

後には、子の活動係を順番に二人決め、係が子の課題活動（お店屋さんごっこ・お話・ゲーム・運動など）をしている

間、他の母親は、話し合いをするという形式をとりました。

冬期間には、ボーリング場の広い集会室を、営利が目的でないのなら、ということでも、無償で貸していただき、とても幸運なグループ活動でした。

幼稚園のことも、よく話題になりました。全ての面で子どもを尊重しながら、その自発性を重んじ、母親も共に育てるような幼稚園が、我が家の近くに見つけられなかったこともあって、このグループが、小さいながら、幼稚園に変わらうものになってくれると良いと内心願っておりました。

しかし、その点に関して、メンバーの目的意識が、実に様々でした。例えば、グループに子どもを預けて、自分は別のおけいごとがしたいとか、子どもにもっと英才教育的な、知的な訓練をして欲しいとかです。

子どもの自発性を重んじる、ということの共通理解が、とても難しいことでした。

それと、私自身三番目の子が生まれることになったため、この「のびのびグループ」は、長男出産の二か月前まで、一年半続き、閉会しました。最後は皆で一泊旅行に行きました。長女は二歳半から四歳まで、次女は一歳から二歳半まで参加したことになります。

長男出産後は、「乳児を連れての頻回外出は、控えたい」と、思っていましたところ、ちょうど近所に四軒も、同年齢の子どものいる人が、引越して来ました。

近所集団の場合、母親は目的集団ではありませんから、せつせと子どもに働きかけ、子どもが居心地よく集まれる場を、提供しました。子どもと遊ぶのが大好きという母親が、もう一人いましたので、その人と協力して、特に外でよく遊びました。

そうこうしているうちに、ポットンポットンと、少し遠くの子も集まるようになってきて、その輪が広がり、冒頭のような風景になっていくわけです。

今では、母親抜きで、朝から夕方まで、あちこちの家で、お山で、遊び回っています。

友だち遊びを始める三歳頃、長女は、近所の友だちが、こんなに充実していませんでしたから、(のびのびグループは、週一回)文字を初め、室内のこと、机上のことに早くから、興味を持ちました。しかし、次女は、三歳頃から近所の友だち遊びが多く、五歳に近いまでに、文字などに興味を示す暇がないようです。(学年が進むにつれ、いやでも受験地獄に巻き込まれていくでしょうが、できるだけあのびのびと

した、自分の本当にやりたいことが、充実してやれるような幼児期―人生―を過ごさせてやりたいと思います。また長男は、ことばの発達が、非常に遅い方なのに、「貸して」「いいよ」「だめ」「どうぞ」「ありがとう」など、集団で遊ぶのに必要なことばは、早く習得したようです。

こうして四歳位までの、親がまだ友だち作りを手伝わなければならぬ年齢での、二つの集団づくりを経験しました。

その結果、四歳位までの子は、三輪車で、行き来できる距離の、つまり町内レベルの集団が、親にも子にも無理がなく、良いと思えました。しかし、そこではえてして、子どもを遊ばせるために、親が集まるという形をとり、母親自身も成長するという要素が、欠けてしまいます。

結局、のびのびグループのようなものが、地域社会と結びついた形で行なえれば、理想的だったわけです。最近薄れてきている地域社会の連帯が、こんな点からも、見直されなければいけないと痛感しています。幼稚園にも、学校にも属さない子を持つ親にとっては、なおさらです。

四歳を過ぎると、現代では、殆んどの子が幼稚園に行つて

しまうので、友だちを求めてという意味で、長女を一番近い幼稚園に入れました。本人は、とても喜んで、幼稚園生活が始まりました。

そうなると、今度はもう親の手の届かない所で、子どもが自分で友だちづくりをするようになります。年長になってからは特に、「お母さん、今日は、△ちゃん、○ちゃんが、遊びに来るよ」と、私が初めて会う友だちが、我が家に入出入りするようになりました。親は、子どもが開拓していく集団に、後から参加していくことになります。もはや集団づくりではなく、できた集団に、どのように係わっていくかが、これからの私の課題になると思います。

それと平行して、私自身の集団づくりも、進めていかなければいけないと思います。

一番下の子が、小学校に入る頃になったら、自分の子だけの親という殻を飛び出して、三十数年の歴史を持つ、一個人間としての集団づくりを、試みたいと思います。専門が、児童学科でしたから、それがまた子どもに関係した集団である可能性が、高いと思いますが、全ての子どもが、平和に暮らせるように、努力していきたいと思っています。